●登場人物

ジャサント号艦長
ドニ・ボーガン

ネオ・テラーズの特殊工作員で、宇宙軍中佐。洗脳施設を搭載したジャサント号艦長として密かに暗躍してきた。

リエリを敬愛する副官
ナオミ・エヴァンス

リエリの優秀な副官。格闘技に優れ、ロボット兵器の操作にも天才的な能力を発揮する。その優秀さから高圧的で、男性を見下す傾向がある。

冷徹なる上級捜査官
リエリ・ビショップ

惑星タイタン出身の美人将校。軍の憲兵捜査部に所属する。ネオ・テラーズ派を悪の組織と憎み、その不正を暴くことに使命感を持つエリート。

監獄戦艦

～非道の洗脳改造航海～

布施はるか
画・カガミ
原作・LILITH

ぷちぱら文庫

長い射精を終えて満足したボーガンは、極めて事務的な口調で告げてアヌスから肉棒を抜き去った。そして、その場に悠然と仰向けになってナオミを呼ぶ。

「さあ、ナオミ。こっちに来い」

「くっ！　うう……。う……！」

奥歯を噛み締めて呻くナオミ。敬愛してやまない上官を無様な姿に追い詰めたボーガンに反抗の意思を示しながらも、洗脳され、脳に埋め込まれたペテンの記憶には逆らうこともできず、〈慰安〉という〈女性軍人にとって重要な任務〉を果たそうと自らを叱咤する。

「しっかり覚えるんだぞ、ナオミ」

「く……！　わ、わかっているっ！」

意を決したナオミは、常に携帯している銃をガンベルトごと外した。それは、敬愛する上官を守るために肌身離さず持ち歩いているものだ。

リエリを恋人のように慕い敬うナオミである。もしかしたら、無様なリエリの姿を目の当たりにして、彼女だけに慰安任務をやらせるわけにはいかないと、自分も慰安任務を頑張って助けになければならないと、ある意味ボーガンにとっては噴飯物の意識を目覚めさせて我と我が身を奮い立てているのかもしれない。

クククッ。なんでもいいが、せいぜい頑張ってもらおう。何せこの艦は50名以上の女に飢えた屈強な男達が乗り組んでいるのだからな……。ボーガンは心の中でせせら笑った。そんなボーガンの心中を知ってか知らずか、ナオミがキッと睨みつけてくる。

「クククッ。さあ、来い」

こうしてボーガンは、リエリに続き、ナオミの〈慰安〉をも受けることになった。

「くううう……⁉　くふううう。はあっ」

いかにも恐る恐るといった様子で、三度の射精を経ても衰えぬ剛直の側面に媚肉のワレメを擦りつけるナオミ。意外にも、彼女の肉粘膜の園は温かくヌメヌメと潤っていた。それを猛る肉茎に押し当てられた瞬間、ボーガンは酸味の混じった電撃がツーンと脳髄にまで疾った気がした。リエリとのセックスでドロドロになった陰茎がネチョッとナオミの肉割れを汚し、粘液を付着させる。薄桃色をした肉ラビアの美しさと艶めかしさは、リエリとどっちもどっちのいい勝負だ。

「ああ……、ナオミ……。さ、さあ、早くマ×コに……チ×ポを入れなさい」

そう言ったのはリエリだった。ようやくベッドの脇に立てるまでに回復したようだ。

憧れのリエリに促され、なんとか彼女の期待に応えようと、ナオミはいったん腰を上げて、自分の肉割れとボーガンの亀頭とをピッタリ密着させる。

「ひっ⁉」

普段の彼女からは想像もできない愛らしい悲鳴をあげたかと思うと、急いで腰を落とそうとするナオミ。さすがに処女ではないことは、ボーガンも昨日の洗脳時に確認済みだった。とはいえ、今のナオミの反応から、それほど経験がないことはありありと窺えた。

「おやおや……。平気か、ナオミ？　クククッ」

ボーガンが小バカにした口調で尋ねるなり、ナオミはカッと勝ち気な美貌を火照らせて気色ばむ。
「くっ⁉　むくうぅ……！　あ、当たり前だ！　この戦艦の乗員くらいは、全部わたしがひとりで相手をしてやる‼」
「ハハッ。威勢がいいな！　だがそんなこと言ってもいいのか？　50名以上いるぞ？」
「よ、余裕だ！　バカにするなっ‼」
けれど、言葉とは裏腹に、秘割れと亀頭を密着したあと、なかなか状況が進展しない。
「どうした、牝豚⁉　さっさと腰を落とせっ‼」
「くぅっ！　あっ⁉　くぅうう……！」
わずかに腰を落とした直後、ナオミの身がヒクンと痙攣する。もっとも、それも束の間のことだ。慌てて自分を取り繕ったナオミは、下唇を噛み締めて両脚を踏んばり直した。
「ほぉ……」
いささか感心した瞳をして、ボーガンはナオミを見上げた。ボーガンとしては、てっきり淫肉を使い馴れていないために痛みもあるのだろうと勝手に思い込んでいたのだ。しかし、そうではなかった。天性の素質なのか、想像に反してナオミは、非常に感じ易い肉体の持ち主らしい。そうとわかれば、黙って身を任せる手はない。
「クククッ。手伝ってやろうか、ナオミ」
「えっ⁉　ひっ⁉　ひいいいいいいいいいいいいいいいいいいっ⁉」

おもむろに腰を突き上げたボーガンが、ナオミの膣奥深くまで一息に貫いた。
「あああっ！　や、やだっ‼　あっ、ああ……、ひはあああああああああああっ⁉」
雷に打たれでもしたかの如く全身をビリビリと痙攣させるナオミは、顎を天井に向け、カッと両目を見開く。ブワッと大量の汗が噴出し、結合部からはドロリと濃密なよがり汁が溢れだす。こともあろうかナオミは、早くも絶頂に達してしまったのだ。
「くうう……！　くっ！　ふはああ……⁉」
「クククッ。おやおや、こいつは驚いた。ナオミはとんだ淫乱女だな。チ×ポを入れただけでアクメに達してしまうとは。ククッ。これじゃ、どちらが〈慰安〉していることやら」
ボーガンが呆れ顔で口の端を邪悪に歪めた。対するナオミは真っ赤になって否定する。
「ああぁ⁉　くぅ……。イ、イッてない！　わたしは……、わたしはイッてないっ‼」
「ほう……。そうなのか？」
「あ、当たり前だ！　いきなりペニスを突き入れてくるから……、お、驚いただけだ‼」
まるで子供だな、とボーガンは苦笑した。リエリもナオミも、揃って強情だ。
「ならば、遠慮はしないぞ？」
言うが早いかボーガンは、ナオミの秘割れへガツガツと肉杭ピストンを見舞う。
「えっ⁉　あっ！　ひいいいいいいいいいっ⁉　あああああっ！　やっ、やめろおおっ！　やめて……、あはあああああああっ‼」
たっぷりと潤んだ心地よい感触の蜜壺の中、ボーガンは心ゆくまで膣襞とカリ首を戯れ

合わせた。人並み以上に繊細で敏感な快楽神経を持ったナオミにしてみれば、もうそれだけで悶絶ものの責めのはずだが、彼女は必死の形相で絶頂を押し隠し続けた。
「んぉおおおっ！　いひぃいいいっ!!　んん……、んごぉおおおおっ！　あはあああああああっ!!　ひはあああっ！　ごおおおおおおっ！　ああ……、ダメ……!!」
「ハハハッ！　なんだ、気持ちいいのか、ナオミ？」
「ああああっ！　だ、誰が気持ちよくなんか……！」
「何度もアクメに達しているようにしか見えないんだが、気のせいなのか？」
「あっ、当たり前だっ!!　あはあああああっ！」
ボーガンのサディスティックなまでの突き上げが、ナオミの腹の底をグチャグチャと掘削し、さらに激しく彼女の肉体を翻弄する。
「ああああっ！　やめろおおおっ！　ああ、ダメええっ！　あはあああああああっ!!」
「ハハッ！　そぉらあっ！　そらそらそらあああっ!!」
「きゃあああああああっ！　嫌ああっ！　ぎいいいいいいいいいいっ!!」
苛烈な電撃に全身をビリビリと打ち震わせ、ナオミが嬌声を張りあげる。
ククッ。リエリは最後まで意地を通したが、さて、ナオミはどうかな……？　そんなことを考えながら、ボーガンは腰の動きをますます激しくさせる。
「あはあああああああああああああああああああっ!!　い、嫌ああああああああああああっ!?」
不意にナオミがビクンと大きく腰を痙攣させたかと思うと、次の瞬間、騎上位の体勢で

ジョロロと金色の温水を迸らせた。モワンと立ち込める濃密なアンモニアの匂い。ボーガンの身を濡らし、ベッドの上へと落ちる流れは、かすかに白い湯気を立てていた。そう。こともあろうかナオミは失禁したのである。いいや。そればかりか失神すらしている。完全に焦点を喪失させた瞳を寄り目にした酷くしどけない顔をして、頬を紅潮させ、信じられないことに悦楽の笑みすら浮かべて気を失っていた。

「ナオミ！　何をしているの⁉　しっかりなさい！　何を……⁉」

リエリが慌てて、ナオミの身を揺さぶって彼女を起こそうとする。しかし、ボーガンはそんなリエリを無言で押し留めた。

「少佐……⁉　でも……」

「いいんだよ、リエリ……。というか……、慰安任務ひとつ満足にこなせない女には、それなりの起こし方をさせてもらう」

キョトンとするリエリにニヤリと笑い、ボーガンはすぐに形相を一変させて失神するナオミを険しい眼差しで見据えた。

「口先だけのクソ女め！　自分が実行のともわない無様な牝豚だということを思い知らせてやるっ‼」

ナオミの膣から無造作に肉棒を引き抜くと、グッタリしたナオミの両脚をかかえ、その身体をふたつ折りにする。腹を圧迫されてヴァギナからトロトロと粘度の高い白濁愛蜜が溢れた。それでもまだナオミは、意識を混濁させたまま、情けない呻き声を洩らすばかり

だ。ボーガンはそんな彼女を俗にいう〈まんぐり返し〉の格好にし、目の前に露わとなった鳶色の菊蕾を覗き込む。ヒクヒクわななく無垢な蕾に欲望が高まる。

「さあ、お前のアナル処女をいただくぞ！」

ボーガンは仮性包茎の亀頭をヌチャリと押しつけ、未だに萎えぬ剛直に絡むリエリとナオミの愛液を潤滑油代わりにして、ナオミのアヌスを乱暴に貫くのだった。

完全な洗脳を施すためには、毎日のメンテナンスが欠かせなかった。それは洗脳の経過を計ると同時に、上書きされる別人格に抗う被験者本来の人格を抑えつけ、最終的に破壊するために必要なプロセスでもあった。

洗脳ラボでは、頼もしきマッドサイエンティスト達、白衣を着た4人の洗脳技術スタッフが、いかにも楽しげにリエリとナオミの様子を調べている。

「ハンス、状況は？」

「問題ありません。〈今日の記憶〉は〈艦長お手製の記憶〉の上に正常に構築されています」

ハンスが言った〈艦長お手製の記憶〉とは、今回の洗脳にあたり、ボーガンがあらかじめ用意しておいた偽の記憶、つまり〈異常な物語〉の舞台設定のことである。今回に限らず、大抵の場合はボーガンが作成した偽の記憶を被験者の脳にまず刷り込むのだ。

「現在の洗脳進行度は？」

「25パーセント程度かと。地球到着までには、確実に〈旧人格〉を削除できるはずです」

ぷちぱら文庫

監獄戦艦（かんごくせんかん）～非道（ひどう）の洗脳改造航海（せんのうかいぞうこうかい）～

2011年　5月30日　初版第１刷 発行

■著　　者　　布施はるか
■イラスト　　カガミ
■原　　作　　LILITH

発行人：久保田裕
発行元：株式会社パラダイム
〒166-0011
東京都杉並区梅里2-40-19
ワールドビル202
TEL 03-5306-6921

印 刷 所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、
かたくお断りいたします。
落丁・乱丁はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。
©HARUKA FUSE ©2011 LILITH
Printed in Japan 2011

PP014

朝からずっしり
ミルクポット
Milky Signora "Iori Yuyukidon" is covering up a shameful secret. It's growing between her groins...!
好評発売中
ふたなり美少女ハレンチに
ぴゅぴゅ♂っ
章ごとに移り変わる、パラレル・イラスト！
豪華ゲスト作家：あらいぐま・三色網戸・蜜キング
Harth Nir
ぷちぱら文庫09
蝦沼ミナミ 著
みさくらなんこつ,他 画
ハースニール 原作
定価 670円(税込)
妄想暴走！お嬢様・伊織ちゃんの過激な日常
みさくらなんこつワールド全開！

ぷちぱら文庫は
ライター&イラストレーターを募集中です!

「ぷちぱら文庫」シリーズを盛り上げる、新たな作家を募集いたします。「ぷちぱら文庫」は、ゲームノベライズだけでなく、オリジナル創作による美少女小説も刊行予定です。
応募規定は、それぞれ以下のようになります。
皆様のご応募をお待ちしております！

1. 募集内容

「ぷちぱら文庫」シリーズでは、美少女ゲームやライトノベルを好む読者層へ向けた作品作りを目指しています。ご応募いただく場合も、ヒロインの個性や魅力が伝わるようなもの、シチュエーションへのこだわりが感じられるものなど、はっきりしたテーマのある作品でお願いいたします。題材はとくに限定していません。発表済か、未発表作品かも問いません。

2. 送付方法

小説の場合は、テキストデータをメールでご応募ください。コミックやイラストは、原稿用紙をお送りいただいても、データをお送りいただいても結構です。データが５ＭＢ以上の場合は、ファイル転送サービスなどをご利用ください。コミックには枚数の規定はありません。小説は１ページを17行×40文字として、50ページ以上の作品をお送りください。

3. 選考結果などについて

メールでご応募いただいた場合は、着信のご連絡は必ず行っています。選考は随時行っており、締め切りはとくにございません。選考終了後、採用の方にのみ別途お返事をしております。通常はお返事までに、２週間～1か月ほどお時間がかかります。

4. 作品の送付先

ご郵送の場合は下記住所までお送りください。メールでのご応募は以下のアドレスで受け付けております。どちらの場合も必ず「お名前、年齢、ご職業、ご住所、電話番号」を書いた紙を同封するか、明記してください。
メールの宛先: desk@parabook.co.jp

〒166-0011　東京都杉並区梅里2-40-19　ワールドビル202
株式会社パラダイム 「ぷちぱら文庫作品応募」係

※ご応募の際の個人情報は、選考結果のご連絡にのみ使用いたします。
作品のご返却を希望の場合は、宛名を書いた返信用封筒と切手を同封してください。